

(昭63・1 新潮社)

⑨ ⑧に同じ。

⑩ 首藤基澄『福永武彦の世界』(昭和49・5 審美社)

⑪ この部分は「リーディングス日本の社会学」19宗教」編集 宮家 準・孝本貢・西山茂(東京大学出版会 昭61・2)による。

⑫ 「無署名」『福永武彦氏へ著者と一時間』(「朝日新聞」昭39・7・6)

⑬ ⑩に同じ。

⑭ ⑩に同じ。

⑮ ⑩に同じ。

⑯ 福永武彦『忘却の河』創作ノオト』(『国文学解釈と鑑賞』昭52・7)

(ひろかわ・かずこ 本学大学院博士課程)

書評

山下久夫著

『本居宣長と「自然」』

古相 正美

三重県の松阪市に本居宣長記念館があることは著名なことだが、近年、ここを母体にして「鈴屋学会」という組織が誕生した。山下久夫氏も、その会員の一人として、精力的に宣長研究をすすめている。『本居宣長全集』(筑摩書房)は間もなく全巻完結をみるであろうし、鈴門の研究書である『本居宣長と鈴屋社中』(錦正社)も世に出て、宣長研究の基礎資料が提示された現在、宣長研究は新しい展開を見せていくことだろうと思われる。そのような中で膨大な研究史を踏まえて、山下氏の『本居宣長と「自然」』が刊行された。

本書は、細分化した宣長研究に異を唱え、宣長の思想・文学の全体に迫ろうとする。「自然」という観念を中心にして、日本人を深部から規定している感性を表現した人物として、宣長を対象化しているのである。

本書にいう「自然」とは、著者自ら、

山川草木という具体的な事物、外部に存在する物質の謂ではない。いわゆる西洋流の nature とは違う。本文にも述べるが、「他者の力を借りないで、それ自身に内在する働きによ

『本居宣長と「自然」』

って、そうなること、もしくはそうであること」、すなわち「おのずから」を指す。nature のように名詞にばかりでなく、「自然と一する」、「自然の〜」といった副詞的にも形容詞的にも用いるものである。

と定義しているように、「おのずから」という意味をもつ。人間の「作為」と対立するものではなく、それを自らのうちに包括してしまう「自然」である。

注意すべきことは、本書が単なる論文集ではなく、全体として次のような目的を持つことである。

ここで宣長の「自然」を問題にするのは、彼を対象化する中で彼とは異なる「自然」を模索したいからである。……(中略)……つまり、「自然」の観念が日本人の心奥を貫流しているという事実を認めた上で、その中から未来の可能性を探ろうとするわけである。より高い価値を創造するための「自然」だ。むろん、容易に新しい価値が生まれるはずはないが、宣長を対象化する意味はそこ以外にあるまい。

山下氏の問題意識は「わたしたち」の問題として述べられていく。本書は三章に分かれるが、第一・二章では歌論や物の哀論を中心に、宣長の描く人間の心を追い、第三章では「自然」を捨てて「神」を押し出すようになった意味を問いかける。以下、目次をあげ、順を追ってみていく。

第一章「心」の構造(その1)

I あらしめられた「心」

- 一 「今」の心の容認
- 二 あらしめられ、生かされた「心」
- 三 「分」の自覚

II 和歌的共同体の心性

- 一 「実情」論の転換
- 二 共同体心性への目醒め
- 三 化シタル自然ノ情
- 四 「作り事」の意義

III ナシヨナリズムの心性

- 一 「自然の神道」・「神の道」
- 二 和歌の優位性

第二章「心」の構造(その2)

I 伝統への帰属

- 一 正統意識
- 二 内なる宮廷権威
- 三 「君子の言」への対抗
- 四 「俗の排除」

II 内的秩序の回復

- 一 「おのずから」に秩序を守る人間像
- 二 前史的状况「公」・「私」の分裂一
- 三 全体性の回復
- 四 保守の心性

第三章「自然」と「神」

I 「自然」の深化

- 一 宣長と老荘思想
- 二 「包越」の「自然」
- 三 「通路」としての「神」
- 四 「悪」への着目

II 神国共同性と「自然」

- 一 「神」のための「自然」
- 二 天皇支配の「自然」化
- 三 吉凶相互移行の論
- 四 共同性への参与
- 五 閉じこめられた「自然」

〇第一章「心」の構造(その1)

I へあらしめられた「心」賀茂真淵が古の心に帰ることを説くのに対し、宣長は古の質朴な心と今の虚偽・虚飾の心は違いすぎると説く。しかし、今の心を否定するわけではなく、今の心で「詞ヲカザリヨクコムガ、歌ノカンジン也」と言い、それが「自然の理」にも叶うのだと主張する。人間は超人間的なものか否かの力(「大日靈貴の寵靈」)によって生かされているため、思いのままを詠めない「今の心」であっても、それは人間に否定できることではなく、容認していくしかないのだと考えた。『排芦小船』においては、歌風の変遷を「自然ノ勢」と理解し、「その時代の

「心」しか所有できない運命的な事態、それを各々忠実に受けとめているか否か」ということを歌人の評価の基準にしている。あらしめられた運命的な己の「分」をわきまえているかどうかが問題となるのである。

II へ和歌的共同体の心性「今の心」を詠むことなどは断念して、伝統的なうわしい詞を使用することにより、心も「古歌の心」になっていく。これは「和歌的共同体の心性」にふれるということでもある。表層の個人的心性を突き抜けて、己の心奥に眠っている普遍的な和歌的共同体の心性を喚起することが大切だということである。それが真の自己の発見にもつながると信じたのだから。そのために、「作り事」すなわち「詞」の精選行為を行なうのだが、それは同時に、その時代にふさわしい「自然」を再生するものでもある。宣長は獲得された共同性、再生された「自然」を重視した。つまり古よりも当世に目を向けているのである。和歌の上でいうと、「作り事」でないのは三代集頃までで、それ以後、つまり新古今歌人達も当代の歌人達と同様の状態にあると見た。新古今がよいのは、三代集に習熟して優れた歌風を生み出した点にある。だから、三代集は直接学ぶべきものであり、新古今は歌作態度を規範にすべきものだと考えていた。

III へナシヨナリズムの心性 宣長において、初期の歌学びの頃から「自然の神道」が介在していたことは明白である。「自然の神道」とは、儒学の「聖人の道」に拮抗すべく編み出された「吾邦の大道」という観念である。この特質として儒教的合理主義を

越える靈妙性・不可思議性が説かれ、やがて時間の推移と共に天照大御神の存在が重くなり、ナシヨナリズムの度合が強くなる。『石上私淑言』では「自然の神道」は「神の道」と表記が変り、また、和歌は吾国のものであり「自然」のものであるから漢詩に勝るという理論ができていく。漢詩への対抗意識を契機に、三代集の詞は「吾国自然の言語」、和歌的共同体の心性は「自然天性の情」、さらには「神国共同体の心性」になる。このようにナシヨナリズムの要素が拡大し、和歌の優位性は「天照大御神の御国」に起因するという主張にまでなるのである。

〇第二章「心」の構造(その2)

I へ伝統への帰属 宣長は三代集、中でも古今集を規範とし、

宮廷へも強い愛着を抱いている。堂上派を批判しながら、追認しているかに見えるのは、堂上派が忘却してしまった歌道本来の伝統を求めようとしたからである。一方、勅撰集の権威を正当化しようとする意識は「自然」の観念を作り上げたが、それにより、宣長は正当な伝統に帰属できたのである。勅撰の権威は宣長が傾倒した宮廷の権威でもある。これは、漢学の治世者意識「君子の言」という権威に対して宣長が求めたもので、「自然の神道」の介在により保証された。宣長は、また、士大夫の文学に対抗するため「俗」を排除した。当時の雅俗混交の文化の中で、伝統の共同性へ向かうために「俗」を排除したのである。「自然」の観念は正統意識を補完すると共に、「俗」を排除する機能をも果たしたのである。この事は同時に、「古道」を失い「俗」に流れる江戸派

などへの批判をも引き起こした。

II 〈内的秩序の回復〉宣長以前には、徂徠学がすでに「公」(經学的方面)と「私」(詩文派・古文辞学派)とに分裂していた。そのような中に登場した宣長は、古文辞学派と違い、「心」を問題にしながらも私的領域に埋没せず、社会秩序の回復のために、「心」の自生的秩序の回復を提唱した。太宰春台が「礼」の外面の規律性によるうとするのに対し、宣長は「自然」を拠に「心」の問題としたのである。一方、「俗」を排するのではなく、それに固執したのが秋成である。宣長の、秩序に従順な共同性を、秋成は信じていることができなかった。彼は、権威から追放された、正史の裏側のものを求めた。そういった意味で宣長の求める共同性は保守的だといえる。

○第三章 「自然」と「神」

I 〈「自然」の深化〉宣長には老荘思想の影響が強くみられるが、やがて、老荘的「自然」を拒否し、「神」へと変化していく。宣長の「神道」は人為を包摂する「自然」であるから、老荘的「自然」を拒否することは、真の「自然」への深化だといえる。逆にいえば、真の「自然」を実現するには、人為と対立する老荘的「自然」と決別する必要があったので、「神」を全面に打ち出したのである。宣長が「自然」の語を捨てて、「神」の理念を全面に押し出した契機には、「悪神」という理念への着目が関係している。彼は、わるきことは悪神の仕業だといひ、人知の計りしれぬ不条理な悪の存在を主張するのである。

私たちは「自然」を「神」に閉じ込めず、人間にむかって開くべきだろう。そして、その指示する相を実存的な次元で受けとめる中で、宣長とは違う私達の共同性を見出すほかあるまい。

宣長の問題を自分の問題として考察した苦心が至るところに見えるものである。「あとがき」にあるように、宣長のライフ・ワークである『古事記伝』に関する論評は本書にはなく、別書にまとめられるという。その書が公開されることにより、山下氏の宣長論は一応の完結をみると思われる。

(昭和六十三年十月二十日・沖積社刊・三五〇〇円)

(ふるそう・まさみ 明治大学講師)

II 〈神国共同性と「自然」〉宣長は、支配者と服従者が個別的ベルを越えて「自然」の「通路」となった上下和楽の共同体像を理想とする。しかし、史実において、服従者である氏族集団には悲劇が有ったことが宣長の論理ではあらわれてこないことは批判されるべきである。また、彼の思想における「悪」は、清め流す行為のための反対物として使用された。不条理な「悪」を処理できなくなったから、「自然」を吉凶相互移行で捉え直したのである。「悪」は、吉事・全吉事(天照大御神の高天原完全統治)にいたるまでの凶悪(必要悪)という形で使用され、それ自体に独自の位相はなく、どこまでも容認される。つまり、人間は吉凶相互移行の中で、天照大御神の大御心を御心とした恩恵と心奥からの服従に生きねばならないのである。こうしたわけで、宣長は「自然」の語を捨てて「神」を全面に押し出した。このことにより「自然」は一層深化し、皇統の不動性へと結びついていったのである。秋成は「自然」の観念で全てを説こうとしたため、相対性にとどまるが、宣長は「凶悪」の容認で、「自然」を絶対的な「神の道」の観念の中に閉じ込めてしまった。世の不条理を実存的に解決しようとする秋成に対し、宣長は吉凶相互移行という共同性により解決してしまうのである。しかし、宣長は「自然」を閉じ込めてしまうことにより、次第に硬直化し、固定化する。「自然」の持つ実存的な相に対する柔軟性を喪失してしまったのである。

それにしても、「自然」を味方につけた宣長の共同性の壁は厚い。秋成ならずとも脱出はなかなか困難だ。しかし、わた